

.....

この1年間の研究所の活動、そして来年度は

.....

ハイライト

- ・この1年間の研究所
- ・時間学ミニ辞典

.....

目次:

この一年間の研究所	1
話題・報告	
時間学研究所の日常	2
所長室より	4
東日本大震災の教訓	
時間学ミニ辞典	4
記憶と芸術	

時間学研究所ニュースレター第6号をお届けします。年度末ですので、1年間の活動をまとめて報告します。また、「時間学研究所ってどこにあるの？誰がいるの？」という素朴な疑問にお答えするために「時間学研究所の日常」をお送りします。

《時間学研究所》
〒753-8511
山口市吉田 1677-1
TEL/FAX 083-933-5848
jikann@yamaguchi-u.ac.jp
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



1. 時間学セミナーの開催

時間学研究所の重要な活動として、例年通り時間学セミナーを開催しています。今年度は3回のセミナーを行いました。まず、第3研究グループが「英語とその他の言語の時制・アスペクト関連現象をめぐって」と題して、4名の先生が時制をテーマに発表をし、その後、全体討議をしました。次いで、第2研究グループが「発生と進化の時間学」というテーマでセミナーを開催しました。計7名の研究者が、生物にとって時間とは何かを物質的な基盤から解明するために、それらを統合的に理解できる基礎の構築を目指しています。具体的には、生物個体の時間について、個体発生、リズム、細胞機能をモデル生物で解析し、進化生物学の観点からそれらを総合的に理解することを試みました。第1研究グループは、時間学研究所が中心となった研究推進体と合同で研究を行っています。セミナーでは「生命的時間と社会的時間の調和を求めて」と題して、青年、中年、高年の時間意識や健康意識などに関する研究成果を発表しています。

2. イブニングセミナーの開催

広報普及的な面で重要な活動がイブニングセミナーです。今年度は「医学と美学の時間学：ストレスと癒し」と題して田町のキャンパス・イノベーションセンターで10月22日に開催しました。医学系研究科の中村彰治教授が「時間から見たストレスとうつ病の脳」というテーマで、次いで人文学部の田中均講師が「芸術における時間——現代演劇を中心に」と題して講演をされました。

また今年1月27日には、MOTの福岡校の開所に合わせて、同校において『時間学』のすすめ」と題した「イブニングセミナー in 福岡」を開催しました。研究所の辻正二所長が「時間学という学問の可能性」というテーマで、次いで九州大学の三浦佳世教授が「時間と速度感の感性心理学—時間の知覚・印象・表現」というテーマの講演をしてもらいました。

そのほか、「時間学特別セミナー」を2回、学内で開催しました。1回目は大阪大学大学院医学系研究科神経細胞生物学講座の八木田和弘先生に「哺乳類概日時計の発生：ES細胞の分化誘導と振動体の形成過程」と題するテーマで講演してもらい、2回目は、産業医科大学公衆衛生学教室講師の久保達彦先生に「交代制勤務による健康影響」と題して講演をして頂きました。

3. サイエンスアゴラの出展

科学技術振興機構(JST)が主催するサイエンスアゴラに、時間学研究所は例年出展しています。2010年度は「時間を実験する」と題して、振動化学反応(BZ反応)実験と、高速ビデオカメラを使ったスローモーション撮影実験という、2つの簡単な実験を観客にやってもらいました。会場は東京・お台場で、天気にも恵まれ、会期の2日間はひっきりなしに来客がありました。

4. 時間学国際シンポジウムの開催

時間学研究所の例年の最大の事業が国際シンポジウムです。今年度は「体内時計と健康社会」と題して山口大学時間学研究所の設立10周年を記念して、12月10日に医学部の霜仁会館で開催しました。

時間学研究所の明石真教授が「ここ

までわかった体内時計のしくみ」と題する講演を行い、続いてアメリカのフロリダ州立大学医学部 Choogon Lee 准教授が「タイミングがすべて:生物時計のひみつ」を、スイスのチューリッヒ大学薬理学・毒性学研究所 Steven Brown 教授が「細胞学的手法によるヒト行動リズム研究」を、労働安全衛生総合研究所高橋正也上席研究員が「『変な』時間に働く人々の健康を守るために」と題して講演をされました。市民の参加も数多くあり、霧仁会館の講義室が満室になるという熱気でした。

なお、山口大学の国際シンポジウムに先立ち、12月8日に「時間学特別セミナー in 大阪大学」が開催されました。シンポジストはChoogon Lee、Steven Brown 両先生、コーディネーターは大阪大学大学院歯学研究科の中村渉准教授でした。

5. 時間学研究所学術講演会

日本時間学会の大会開催に合わせて、2010年6月5日(土)に山口大学人文学部大講義室で時間学研究所の学術講演会を開催しました。今年度は、井上慎一(山口大学時間学研究所元所長・時間生物学)が「『死』の生物学」と題した講演を、愛知教育大学教育学部中筋由紀子准教授が「記憶と親密圏」と題して、慶応義塾先端研究センターの鈴木生郎研究員が「死と時間の形而上学」と

題して講演を行い、その後、時間学研究所の青山拓央准教授をコーディネーターにシンポジウムを行い、終了しました。約130名の方々に参加いただき、フロアからも多数の質問を受けることができました。

6. その他の活動

この他、科学未来館の企画への貢献、各種メディアの取材、様々な市民向け講演会、パンフレットの製作など、時間学の発展と普及に努めています。山口大学学生への教育として時間学の講義を前後期に実施しています。

各所員の研究活動も活発に行われています。明石真教授らが「ヒトの体内時計測定法」を開発し、時間生物学会の学術奨励賞を受賞し、マスコミを賑わせました。青山准教授は単著『新版 タイムトラベルの哲学』(筑摩書房)、共著『〈私〉の哲学を哲学する』(講談社)を出版しました。藤澤教授は新たに研究プロジェクトを起こし、中国、韓国、台湾との間の観測システムの構築の準備に入りました。

所内では毎週定例会の会議が開かれ、活発に情報・意見の交換が行われるようになりました。「開かれた時間学研究所」を目指し、10月からはニューズレターを毎月発行し、研究動向や研究所の活動を紹介することにも努めています。

時間学研究所の日常

ときどき「時間学研究所ってどこにあるの?何やっているの?」という質問を頂戴することがあります。そんな素朴な質問にお答えするために時間学研究所の事務室におじゃまして、研究所の日常について事務員の平田博子さんと笠井伸太郎さんにお聞きしました。

—— 時間学研究所ってどこにあるの?と思っている方も多いようです。

平田・笠井 吉田地区の総合研究棟です。ここに所長室と専任教員3名の研究室があり私たちの事務室もあります。でも、時間学研究所の研究に参加する先生方は色々な学部にも所属されていますね。参加者のリストによればほとんど全学部から、100人ほどの先生方が何らかの形で研究に関わられています。

—— 研究所には誰がいるのでしょうか?

辻所長と藤澤、明石、青山の3人の所員の先生、そして私たち事務スタッフが2名です。それから明石研究室の技術補佐員の荒木良吾さんと松村律子さんも所員と言ってよいでしょうね。時間学研究所を所管するのは学術研究部研究推進課です。五味課長をはじめ、研究推進課の皆さんには本当にお世話になっています。



総合研究棟。ここの1階に所長室と事務室があります。



研究所の廊下。様々なイベントのポスターです。

——— 他にもいろいろな人が出入りしているようですが？

そうですね、辻先生や藤澤先生の学生さんがしょっちゅう事務室に出入りして雑談したりお茶をしたりしています。そのような人たちは大勢いますよ。松野浩嗣先生の卒業生も帰省する度に顔を出してくれますし、東京でイブニングセミナーを行うときには、設営から懇親会の準備までしてくれます。医学部保健学科 2 年の利川麻里ちゃんは吉田キャンパスでの 1 年生時から、とりわけ献身的に研究所のイベントを支えています。昨年の国際シンポジウム成功も実は彼女の協力が大きいです。

中国人留学生のタクさんは研究所のイベントにはご家族で参加されますし、現在母国バングラデシュ Jahangirnagar University で 学部長になっている Akond さんや Sarker さん、他にもモンゴルからの研究員 ERIKA さん（獣医）など、多くの国から来られた留学生の方々の実働スタッフとして協力してくれますね。彼らは帰国しても山口大学に時間学研究所があるっていうのを伝えてくれる、こんな人のつながりは研究所の大切な財産です。

——— まるで留学生センターのよう！素晴らしいですね。何がそうさせているのでしょうか？

それは良くわかりませんが、「開かれた時間学研究所」を目指しているのが功を奏しているのかもしれません。例えば研究所には時間に関する図書を多くそろえているのですが、山口大学の学生さんだけでなく一般の方、よその大学などからも借りに来る方がいるのですよ。

——— 確かに時間に関係する図書が多数ありますね。

辻先生が特に力を入れて、これらの書籍の収集を行っています。これらの財産を活用して時間学を発展させられるとよいですね。

——— ところで、事務室では普段、どのような事をしているのでしょうか？

まあ、まずは研究に関わる事務仕事一般です。例えば所員の勤務や出張に関わる事務、予算の管理、国際シンポジウム、公開学術シンポジウムや時間学セミナー、ニュースレターの発行、各種会議の準備、研究所の広報などでしょうか。日本時間学会の事務仕事の支援も重要です。そういえば、今年度から毎週月曜日に所内会議を開催しているのですが、これで研究所の一体感が強くなってきたと思いますね。先生方が出張の手土産をご持参されてみんなでご馳走になったり、いつも賑やかな事務室です。

——— そうですか。時間学研究所も設立から 10 年、だんだん変わってきたのでしょうか？

最近特に変わってきたと思いますよ。数年前、時間学研究所のことを他大学で話したら、鼻で笑われたことがあったのです。それが悔しくて。でも最近ではテレビや新聞や雑誌でしばしば取り上げられますし、認知度は高まりましたね。それには、最近の明石先生のご活躍もありますし、また 10 年間の様々な地道な努力、例えば色々な学内セミナーや学外のイブニングセミナー、時間学会の設立など、努力のたまものと思います。昨年よりニュースレターも毎月発行され、情報発信も活発になっています。また、かつて山口大学にいた一川先生（現、千葉大学）や入不二先生（青山学院大学）などが外部から時間学研究所のことを応援されているのも大切なことだと思います。

——— では最後に、今後の時間学研究所に対する事務室の抱負をお聞かせください。

4 月からは時間学研究所のHP もリニューアルし、よりアクティブに活動していきます。

今後、研究所は人員も増え、山口大学の重要な拠点になると期待しています。その時、色々な先生や学生さんがばらばらにいたのではなく、細胞から宇宙そして哲学まで様々な専門分野の方が自由に交流を行って、それが新しい研究を生み出す力になってほしいですね。事務室がその接点となる場所を提供できれば、と思っています。



事務室にて、平田さんと笠井さん。



所長室より

東日本大震災の教訓

東日本を襲った今回の地震は、マグニチュード 9.0 という千年に一度の大地震だったといわれている。被害者の方々に心を込めて哀悼を表し、一日も早い復興を期待しています。

さて、聞くところによると、今回の地震の場合、地震からの直接の被害より、津波による被害の方が圧倒的に大きかったという。その上、東京電力の福島原発の事故が重なり、二重の大災害を生んでしまった。一方は自然の猛威、他方は原発事故の怖さである。そして、共通していたのは、「想定外」というものだった。

実は、三陸海岸への津波の襲来は、今回が初めてではなかった。1960年のチリ津波の時にもこの地は大きな被害を受けた。この地は何度となくこれまで津波の経験をしてきた。これに対して福島原発の方は、事故に備えて海岸近くに設置されていた。三陸の地の多くは津波予防の強固な防波堤を備え、宮古のものは 10m 級の津波に耐えるものだったというが、しかし、原発の方は、5.7m 級の津波を想定していたにすぎなかったという。これは津波が原発事故に繋がった経験がないからという。ただ、なぜ、巨大な大地震・津波が我が国で起こると予想できなかったのでしょうか？つい数年前、インドネシア沖の巨大地震がタイやインドネシア等の国々に甚大な被害を

もたらしたし、昨年チリでも巨大地震が起きていたのにである。これら大災害が教訓として我が国には伝わっていなかったようである。本当に「想定外」という見解で済むのであろうか。私には、どうも私たち日本人のリアリティと感性が鈍ってきているのではないかと思えてならない。

地球では、周期的に大地震が起こることは知られている。また、ここ数年でも世界各地で大型の地震と災害が生じている。しかもインドネシア沖の大地震が大津波を生んだのであるから、我が国でも起こる可能性があると思える。あの時、我が国では「起こるかもしれない」という言葉は聞こえなかった。もしあったのであれば、確実に被害者は少なかったはずである。

「災害は忘れた頃にやってくる」とは先人から語り継がれてきた言葉である。寺田寅彦も「文明が進めば進む程天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」と言ったことがある。どうも私たちは文明のもつ予測力に頼りすぎて、先人たちがやってきたことに目を背けてきたのではないだろうか。

(辻 正二)



時間学ミニ辞典

【記憶と芸術】

時間という観点から芸術について考える場合、重要なテーマの一つとして記憶と芸術との関わりが挙げられますが、これについて、ドイツにおける「文化的記憶」の研究者アライダ・アスマンの『想起の空間』（初版は 1999 年）を参考にしつついくつかのポイントを素描したいと思います。

そもそも西洋の芸術はその起源からして記憶と不可分の関係にありました。古代ローマの哲学者キケロの『弁論家について』によれば、シモニデスという古代ギリシアの詩人は、「うたげに招かれた館の天井が崩落したあとで、[...] 遺体の身元を、列席者たちの席順から同定することができた」(p. 41) と伝えられており、これが知識を空間に位置づける西洋の記憶術のモデルになりました。さらにシモニデスは、「神々や英雄の他に、死すべき人間をも詩歌でたたえ」(p. 50) た最初の詩人と伝えられています。つまり彼の詩は、人間の死後もその名声を記憶に残す役割を担っていたのです。

このように芸術(家)はそもそも知識や名声を保存する存在として捉えられてきましたが、(大きく時代を飛躍すると)現代の芸術にとっては、失われた記憶、あるいは捨てられた記憶が重要な主題となっています(この場合の現代は、1970 年代

に始まり特に 80 年代以降を指します)。たとえばアンゼルム・キーファー(1945-)が 1985 年に開始したプロジェクト《二つの大河に挟まれた土地》は、鉛でできた本から成る図書館ですが、その「本」には風景の写真や髪の毛、エンドウ豆などがはさまれています。文字は書き遺されていません。そこで人は知識を得ることはできず、知識を保存しようとする人間の営みについて思考することだけができるのです。

またイリヤ・カバコフ(1933-)の作品ではゴミが重要な意味を持っていますが、その場合のゴミは匿名の廃棄物ではなく、「証明書類、招待状、スケッチ、処方箋」等々の紙ゴミのように、カバコフ自身の「思い出を支え、証明してくれる自分自身の生活の遺物」(p. 464)です。自分のゴミを保存、分類、展示する彼の作品は、ソビエトから亡命する以前の彼の日常生活を記録していると同時に、ソ連の警察機構による証拠品の収集を想起させますが、より一般的な問題として、美術館に収蔵され、(すくなくとも建前上は)最大限の配慮をもって保存される物と、ゴミとして廃棄される物とはいかにして区別されるのか、という問いを喚起しているとも解釈できるのです。

(人文学部 田中 均)